

悪 霊 第八部・菊と李花の紋章

悪
霊
第八部・菊と李花の紋章^{エンブレム}

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
猪俣佐和子……………党での名前は井上
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤児院建設に奔走する
佳代……………貧しい農家の娘。
飯島貴代美……………元女工。モスクワ留学から帰国し党中央委員になる
李麗姫……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
韓愛子……………元玉ノ井の娼婦。源氏名はまち子
金沢文字……………貧民窟に暮らす少女
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に。
磯田アヤノ……………小百合の叔母。華道の師範
磯田幸吉……………小百合の叔母の夫。高等小学校教師
磯田悦子……………東京に家出して小百合に救われ、磯田夫妻の養女になる
宮様……………陸軍大尉。参謀本部作戦課付。後、弘前歩兵第三十一連隊
村野栄太郎……………左翼の学者。党中央委員長になる
岩本……………大学出身の党中央委員。文芸評論家
赤間……………大学出身の党中央委員
畑野達男……………労働者出身の党中央委員
清水……………労働者出身の党中央委員
小泉俊吉……………農民出身の党中央委員

- 安藤浄海……………貧民街の僧
安藤澄……………東京帝国大学国史科助教。安藤浄海の息子
朴正烈……………朝鮮人青年
洪谷少尉……………宮様付きの将校
磯村中尉……………皇道派青年将校
香野中尉……………皇道派青年将校
林原少尉……………皇道派青年将校

【時・場所】

昭和八年（一九三三）一月～六月。弘前市、東京。

昭和八年。正月の松もとれて十余日がすぎた。

宮様がおいでになる……。

弘前の磯田家は、そわそわと落ち着かなかつた。

「しかも、うちの学校にお立ち寄りになり、昼餐をとられた後、植樹されるといふんだよ」

夕食の席、当主である小学校教師の幸吉は、有り難いのか有り難くないのか、よく分からないまま、興奮の態だった。

「今日も、朝から大掃除。間違いがあつてはならないと、校長先生自らご検分だ。いや、こんなに大事だとは思つてもみなかった」

陸軍大尉であり、参謀本部作戦課に所属する天皇の弟宮が、青森県に来て、各地の連隊を視察されるといふ。その道々、学校や観光名所、寺社名跡に立ち寄り、地元の人々の饗応を受ける。それもまた、尊い血筋の宮様の大切なお仕事であつた。

「叔父さまが、そんなふう慌てふためにらつしやると、おかしいわ」

安西小百合が笑つた。

「もっと、進歩的な方かと思つていましたのに」

「しよせん、宮仕えですよ」

幸吉は笑い、それに対して妻であり、小百合にとって母方の叔母にあたるアヤノも「モーニン

グを新調しろ、なんて言うのよ。貸衣装で十分なのに」とからかつた。十四歳になつた悦子は「反動的ね」と笑つた。どこでそんな言葉を覚えたの、と訊ねると「あたし、本読んでるもん」と澄まし顔を見せた。

孤児院建設を目指し、日本全国の施設を見学していた安西小百合は、昭和七年から八年にかけての年末年始を、弘前の磯田アヤノの家で過ごした。松が明けた後も、弘前にとどまつた。地元の高等学校に孤児院研究を専攻する学者が奉職しており、小百合は磯田幸吉を通して、授業の聴講を許された。その傍ら、地元の有力量との交流を広げた。最初の孤児院は、頼れる親戚である磯田夫妻がいる弘前の地に建てるのが、小百合の目標だった。高等女学校に進み、すでに二年生になつた悦子は、卒業したら小百合姉ちゃんの孤児院で働くんだと張り切っている。

「おお、そうだ」

幸吉が言った。

「植樹祭なんだが、小百合さん、あんたも出席するよう、校長から言いつかつた」

「え？」

小百合は驚いた。まだ二十歳、いまだ職につかず他家に寄宿している未亡人の彼女が、なんの資格があつて宮様の植樹祭に出席するのか。

「小百合さんが弘前の高校で、孤児院設立のために授業を聴講している事が宮様のお耳に入つてね、ぜひ、会いたいとおっしゃられているそうだ」

「ありがたいことじゃないの」

アヤノが嬉しそうに目を細めた。

宮様が応援していただいているとなれば、孤児院をつくるにあたっても、いろいろとやりやすくなると思うわ。ぜひ、出席なさい。

磯田家の人々と違い、小百合は素直に喜ぶ気にはなれなかった。なぜ、自分のことが宮様の耳に入ったのか。考えられることは、一つしかない。

半月後。

植樹祭当日、幸吉が勤めている高等小学校の校庭に集まった来賓や生徒が深々と頭を下げるなか、校門をくぐって入場してきた宮様を、小百合は上目遣いに見て、やはり……と唇を噛んだ。

警察官や軍人に先導され、案内役の弘前市長と並んで歩む陸軍の制服姿の宮様の後ろに、黒い和装の伊集院満枝がいた。

朝十時。前日まで教員と生徒が総出で雪かきを終えた校庭の隅に、大きな穴が掘られ、その傍らに植樹する松が菰に包まれて置いてあった。校庭には生徒全員が並ばされ、磯田幸吉ら教員が傍らに付き添っている。安西小百合は、張られた天幕の下に、弘前市関係者、弘前連隊将校、地元産業界の重鎮といった来賓に混じって緊張の面差しで立っていた。

伊集院満枝が、どのような資格で、来賓ではなく、「宮様御一行」の一員として来校したのか。満枝が満州滞在中に多くの陸軍軍人と親交を深めたことや、小百合が弘前に孤児院を作ろうとしていることを知ってか知らずしてか、弘前市内の病院や養老員などの施設に多額の寄付をしていることなど、小百合が知る由もない。

深々と頭を下げた小百合のすぐそばで、「宮様」が足を止めた。

「殿下」

声の主は伊集院満枝だった。

「その女性が、さきほどお話しした安西小百合さんです」

「そうか」

甲高い声だった。小百合は総身がこわばれるのを覚えた。会場のすべての人々の視線が集まっているように感じられた。

「小百合さん」

満枝が言った。

「お顔をおあげになって」

はい……。かほそく答えて顔をあげると、カーキ色の軍帽、軍服に身を固め、眼鏡をかけた「宮様」が、小百合の顔をのぞき込んでいた。ご真影に見る陛下そっくりの面立ちだが、髭をたくわえてはいない。「宮様」の背後に伊集院満枝が伏し目がちで立っている。「宮様」が口を開き、独特の抑揚のある声音で問うた。

「孤児院を作ろうと、勉強していると聞いたが」

ラジオで聴いた歌舞伎のお殿様のような喋り方だ。秘かにそう感じつつ、小百合は身を縮めるようにして、はい、と頭を下げた。

「よいことです。恵まれない、哀れな子供たちのために、励むように」

そう言って「宮様」は踵を返し、去っていった。顔をあげると、伊集院満枝が宮様について歩きながら、ちらりとこちらを振りかえり、笑顔を浮かべた。心から嬉しそだったのが、かえっ

て小百合の胸の裡にさざ波を立たせた。

その日の夜、磯田家では、植樹祭の出席者に配られた紅白饅頭や赤飯の弁当が広げられた。「いやいや、驚いたねえ」

緊張から解放されたせいかわ、幸吉はいつにもまして饒舌だった。

「殿下が、小百合さんにお声をおかけになった時には、心臓がどきどきしたよ。何か失礼があつては大変だからね。」

「どんな方だったの、宮様って？」

悦子に問われ、え、よく見えなかった……と小百合は口ごもった。実際、眼鏡をかけているくらいしか、覚えていない。

そんなことより、伊集院満枝の存在が、心の奥底で引っかかっていた。一年前、小百合の夫・増田喬は満枝が大株主である川奈産業の社用で赴いた上海で変死した。その際、満枝は小百合に、白紙の小切手を見舞金として渡そうとした。小百合は最初拒否したが、孤児院建設に役立てれば、と二十万円を受け取った。その一部を割いて全国の孤児施設を見学したり、高校で授業を聴講するためのお金に充てたのだ。

その後、満枝に会うことも、連絡を取り合うこともなく、お金も一切貰っていない。一年ぶりに再会した満枝は、ますます美貌に磨きが限り、洗練された雰囲気醸し出していた。社会的な立場からくる自信だろうか。皇族の傍らにいても、まったく動ずることなく堂々と振舞っている。特に、羨ましさや妬みは覚えなかった。孤児院建設のためなら、彼女の並はずれた財力を利用して

て、やると決意した小百合だったが、会うたびに出世魚のように女っぷりとご威光を増していく伊集院満枝の妖しい輝きに、目が眩みそうになる思いを避けることはできない。

磯田家の賑やかな会話に相槌をうちながら、小百合の面差しは冴えなかった。言葉少なくなつた小百合に気づいたのは、悦子だけだった。

同じ頃。

弘前市内の老舗旅館、本館から中庭を貫く渡り廊下の先に「離れ」と呼ばれる別館が建っていた。こぢんまりとした平屋建てだが瀟洒な檜造りで、特別なお客だけが泊まることができる。

その「離れ」を二名の兵士が寝ずの番で警護していた。「離れ」に泊まっているのは「宮様」だった。弘前に駐屯する歩兵第三十一連隊の宿舎に泊まる予定だったが、たつての所望で、人目のつかない場所で一夜を過ごすこととなったのだ。

中庭に足音が響いた。兵士が眼をやると、少尉の肩章をつけた将校が二人、歩いてきた。いずれも地元の連隊所属ではなく、「宮様」付きとして東京の参謀本部から派遣されてきたエリートたちである。

「ご苦労」

しゃちほこばって拳手の礼をする兵士たちに、将校の一人が言った。

「今夜は、我らが警護する。宿舎に帰って休んでよろしい」

兵士たちは顔を見合わせていたが、やがて「は！」と再び拳手の礼をして、去っていった。兵たちが消えるのを確かめて、将校の一人が合図し、暗闇から人陰が現れた。

旅館の仲居のような地味な和装の、伊集院満枝だった。

どうぞ、というふうには、将校が手を離れのほうに向けた。満枝はにっこりと微笑んでお辞儀をし、離れに向かって歩いた。

「すごい美形だな」

伊集院満枝が、離れの濡れ縁に上がり、正座してなかに声を掛け、襖を丁寧にあけて入っているのを見届け、将校の一人が溜息混じりに同僚に向かって言った。

「殿下がお気に召すのも分かる。俺たちもお相伴にあずかると、なおよいのだがな」

陽気な面立ちの将校は、小さな声で喋った。「皇族」の夜のお相手をしたがる女性が多い。「皇族」によっては、侍従やご学友、おつきの将校とともに、そういう女性のお相手をお務めになると聞いている。

「殿下が、そういうお方だとよいが、それなければ、我らは一晩、寝ずの番だ」

二人の将校は、特に殿下の身辺のお世話をするよう、言い含められてついでにきている。「宮様」が、公式の予定にない、女性が絡む「御用」ができたとき、その警護を一般の兵に任せるわけにはいかない。だから、将校であるにも関わらず、寒い夜中に「離れ」の外に立っていないなければならないのだ。

「貴公」

陽気な将校のお喋りを黙って聞いていたもう一人の将校が、はじめて口を開いた。

「静かにせい」

堅苦しい面差しから発せられた、威圧感のある声音に、陽気な将校は口を閉じ、やがて咳くよ

うに言った。

「渋谷少尉、貴公は堅苦しすぎる」

渋谷と呼ばれた将校は、何も答えず、背筋を伸ばして立っていた。

「よく来てくれました」

離れの内部、八畳敷きの畳の間で、陸軍大尉の「宮様」は軍服を着けたまま、正座して伊集院満枝を迎え入れた。満枝は三つ指をつけて深々と、額が畳につくまでお辞儀した。

「わざわざ来ていただいたのは、他でもない」

眼鏡をかけた「宮様」は、姿勢を崩すことも、面差しを動かすこともなく、唇だけを動かして言った。

「昼間、植樹祭の折、あなたが言った言葉の意味を、深く知りたいからだ」

頭を下げたまま動かない満枝に、「宮様」は言った。

「このままだと、帝国は滅びる。あなたはそう言った」

満枝の肩がわずかに動いた。植樹祭が終わり、別れ際に「宮様」の耳元でそう囁いた。旅館の離れに密かに呼ばれたのも、満枝の思い通りだった。思わず唇がほころび、それを見逃さなかった「宮様」は、やや語調を強めた。

「満州や朝鮮を見てきたあなたが、なぜそう思ったのか、述べよ」

「はい」

初めて言葉を発して、満枝は頭をあげた。笑みを浮かべ、まっすぐに「宮様」を見た。大日本

帝国の皇族として、いかなる時にも感情を表に出さぬよう育てられてきた「宮様」の能面のような面差しを見つめつつ、満枝は言った。

「満州でも朝鮮でも、日本に対する反感は日に日に、募つみっております」

その不満は、満州事変以来の関東軍の軍事行動によって、ますます膨れあがっている。そういう満枝に、「宮様」は問うた。

「では、支那人や朝鮮人が、反抗してくるといえるのか」

「いいえ」

満枝は笑顔で首を振った。

「反抗しても、日本の支配を覆くぐすだけの力は、彼らにはありません」

「では、なぜ……」

はじめて、「宮様」の面差しがかすかに動いた。

「あなたは、帝国が減びると、そう断言するのか」

満枝は、唇を大きく広げて笑い、そして言った。

「このままだと、帝国は世界を敵に回すからです」

いぶかしがる「宮様」に満枝は言った。

「日本人が、支那人や朝鮮人を支配する方法が問題です」

「過酷だと言うのか」

「違います」

満枝は、静かに言った。

「手ぬるいのです」

言うなり、満枝の膝が動いた。瞬時にして、距離を置いて両手を床に置いていた満枝は、「宮様」の間近に迫っていた。右手が、「宮様」の喉をつかんでいた。左手は、軍服の股間をつかんでいた。左右の手に力が込められ、その痛みに呻うめいたとたん、満枝は全身を前に倒した。「宮様」は、仰向けに倒れた。仰向けに倒れた「宮様」の喉笛のどふえと陰囊いんのうは、満枝の掌中であつた。

「お静かに」

恐怖に眼を見開いた「宮様」を見下ろし、満枝は微笑んだ。

「お声を出したら、潰つぶしますわよ」

そう言い、左手をわずかに動かした。わずかに動いた指に辜丸こぶをひねられ、「宮様」の口から小さな呻うめきが漏れた。

よろしいですか……。伊集院満枝は言った。

人民を支配する時、持ちうる手段は二つです。仁政じんせいで敬服させるか。それとも恐怖で押さえつけるか。

大日本帝国の植民地支配はいずれでもありません。そう言って満枝は、いきなり宮様の頬を平手打ちにした。宮様の眼が大きく見開かれた。能面のような面差しが崩れ、怒気が浮かんた。

「日本が、朝鮮人や支那人にやっているのは、これです」

殿下、いま、わたくしにお怒りですわよね。満枝は微笑んで言った。当然です。誰だつて頬を叩かれたら怒ります。

「では、これなら、如何ですか」

いきなり、満枝は「宮様」の鞆丸をひねりあげた。悲鳴が発せられる前に、満枝の唇が「宮様」の唇を塞いだ。鞆丸を掴んだ手を緩め、唇を離した。「宮様」は息荒く喘ぎ、眼から涙が滴り落ちていく。もう一度、言います。声を出したら潰します。そう言っただけで満枝は再び、指に力を込めた。

「やめよ」

弱々しい声が「宮様」の口から漏れた。満枝が唇を歪めて笑った。「宮様」は、眼から涙を流した。たたらせ、嘆願するような面差しで満枝を見つめている。

満枝は静かに言った。

「これが、恐怖です」

西欧人のやり口は、こうです。彼らは、支配する国の民を、人だとは思っていない。家畜と同じだと思っている。だから家畜を扱うように扱う。

「ご存じですか、殿下」

満枝は言った。

「種馬以外のオスは去勢する。これが、家畜を飼う時の鉄則です」

日本人は口では、支那人も朝鮮人もロシア人もモンゴル人も、同じ同胞だと唱える。五族協和その言葉は美しい。だが実情は違う。あからさまな苛政を行っているわけではないが、朝鮮でも満州でも、同じ職種なら日本人のほうが多額の報酬を得る。日本人以外は入れないホテルや料理店も多い。そうした「差別」という平手打ちを浴びせておいて、口では美辞麗句を並べれば、か

えって相手は恨みため込むだけです。

支那人はやがて立ち上がるでしょう。軍事力で日本に勝てなくても、彼らは欧米諸国に、日本の横暴を宣伝します。誇り高い日本人はそれに耐えられず、必ず、支那を懲らしめよという声が高まる。なぜなら日本人は、彼らの頬を平手打ちしたと思っていないからです。仁政を施し、文明の光を当ててあげたのに、なんて恩知らずな連中だと憤るはず。民衆の怒りの声に乗じて、軍人は政府の命令を無視して大陸で好き勝手に動くでしょう。まずは日本の評判は落ちる。そして世界を敵に回す……。

満枝は、「宮様」の後頭部に腕を回し、引き寄せた。「宮様」の顔を、自分の胸にそっと押しつけた。「宮様」は、満枝のなされるがままだった。

「まず去勢して、しかる後に、抱きしめる……それが、支配の要諦だというのに」

呆然と、半ば陶然とした面差しで、「宮様」は満枝の胸に顔を埋めていた。

その十数分後。「離れ」から現れた伊集院満枝は、衣服にも髪の毛にも寸毫の乱れも見せず、警護に立つ二人の将校に婉然たる微笑みに向け、お辞儀をして去った。

将校二人は、しばし満枝の背を見送り、一人が咳いた。ずいぶん早かったな。生真面目な渋谷少尉は、僚友の背中をどやしつけ、離れにあがって部屋の前座った。

殿下。声をかけると、何か、と室内から静かな返事がかから聞こえてきた。もうお寝みになられますか？ そう聞くと、うむ、と肯う。特に変わった様子もない。渋谷少尉は、失礼します、と声をかけて去った。

部屋のなかでは、「宮様」が布団の上に正座し、呆然と壁を見つめていた。

その一時間後。

大通りから離れた細い路地を、羽織袴姿の四十男と、同じいでたちの若者が肩を並べ、ほろ酔い加減で歩いてきた。ともに肩幅が広く、頭を角刈りにして、歩き方に武道の心得があるとうかがえた。

「しかし君、やはり宮様というのは、お偉いものだね。歩いてらっしゃる御姿の神々しさ。かたじけなさに涙がこぼれたよ」

四十がらみの柔道家が言った。

「近頃は、例のギャング事件じゃないが、左傾学生の思い上がりは目に余る。ここは一つ、思想善導のために、われわれ武道家もがんばらねばならん」

二人は、地元道場で柔道を教える師範だった。政府は、学生の左傾対策として、武道の振興を謳っている。今回の植樹祭にも招かれ、その後、学校内の道場で模範演技も披露された。二人にとっては、晴れの舞台だった。

「宮様は、日本精神をこの弘前で広めていくための、よい機会をお与えくださったんです」
鼻が潰れ、頬があばただらけの弟子は、袖で涙を拭いた。

「先生、ぼくはやりませよ。今日の出来事を、明日の柔道界の発展につなげるため、びしびし弟子どもを鍛えて、大和魂をたたき込んでいきます」

「うむ。この頃の子供は、少したるんだからな。軍隊式で、ぜひ頼むよ」

そう言って柔道家は、ちょっと失敬、と立ち止まり、壁に向かって立ち、袴の帯を緩めた。弟子は、柔道家に背を向け、通りを見張った。

ふと、路地の角から一人の女が現れたのに気づいた。紺色のセーラー服を着た、背の高い美少女である。弟子は当惑して、背後を振り返った。柔道家は、心地よさそうに小水を垂れ流している。君、別の道を通り給え。そう眼で伝えたつもりが、美少女は足早に寄ってきて、あつという間に弟子の前に立った。

「ぐっっ！」

弟子は呻いた。美少女の膝が、若者の袴の股間に食い込んでいた。弟子は両手で股間を押さえてうづくまり、吐瀉物をはき出した。

「どうしたい」

用足しを終えて振り返った柔道家は、いつの間にか現れた美少女の傍らで、愛弟子が両手で股間を押さえて悶絶するのを眼にし仰天した。

「吉田くん、大丈夫か？」

弟子に駆け寄り、背中をさすったりしてから、顔をあげて美少女を見た。

「いったい、どうした。何があったんだ？」

そう言って柔道家は、薄暗い街灯に照らされた少女の面差しに、見覚えがあるのに気づいた。

「あ……あなたは……！」

言っただとたん、柔道家の鼻柱に、美少女の靴の踵が打ち込まれた。鼻柱を折られ、柔道家は仰向けに倒れた。血が噴き出す鼻を押さえて立ち上がり、な、何をするか……と呻いた。

「武術家のくせに、女一人に、なんて無様な」
美少女は鼻で笑った。

「き、貴様……」
柔道家は顔を赤くして、眦まなじりを怒らせて突進してきた。美少女の胸ぐらをつかんで投げ飛ばそうとした瞬間、股間に痛撃を覚え、動きが止まった。辜丸を膝蹴りにされ、両手で股間を押さえ、うずくまった。

「さっき、あなたの弟子に同じ事をしたばかりだというのに、分からなかったの？」

美少女は、柔道家の髪の毛を掴んで顔をあげさせた。涙と鼻血で汚れた顔に平手打ちをくわせ、静かに笑った。

「なぜ……」

柔道家は呻いた。

「こんなことを……あなたは、さつき宮様と……」

美少女——言うまでもなく伊集院満枝だった。今朝方、「宮様」の背後に恭うやうやしく傳かすっていた満枝が、なぜ今、女学生のような格好でここにいる、見ず知らずの自分たちの辜丸を蹴り上げ、鼻柱を蹴り潰し、激痛と屈辱を味わわせているのか。その不条理に考えをめぐらす暇は与えられなかった。満枝は柔道家を仰向けに倒し、股間に踵を打ち込んだ。辜丸が碎かれ、陰囊が割け、袴が赤く血に染まった。柔道家は一瞬海老反りに反り返り、眼を剝むいたまま、動かなくなった。

小さく悲鳴があがった。武道に精通しているはずの師匠が、セーラー服の美少女によって去勢されるのを見た弟子は、恐怖に眼を見開き、齒をかち言わせながら震えている。満枝は唇を

歪めて笑い、ゆっくりと弟子に歩み寄った。

翌日の夕方。

弘前市内で柔道家の師弟が、前夜、無惨に殺害されたとの記事が地元の新聞に載った。記事は遠回しに、二人が辜丸を潰されて死んだことを伝えている。

新聞を持つ手が細かく震えて止まらなかった。紙面から目を離すことも、身じろぎすることもできなかった。安西小百合には、犯人が誰か、分かっていた。

その日の夜。

「ねえ、お姉ちゃん」

磯田家の二階の四畳半の小部屋、壁ぎわに設しつらえられた文机ふつぐえに向かって勉強していた悦子が、声をかけてきた。向かい側の壁に背をもたせかけて本を読んでいた小百合は、顔をあげて、なあに、と答えた。

悦子は、体を小百合のほうに向けて、座布団の上に正座した。

「小百合姉ちゃんに、お金をくれた伊集院さんっていう女の人のことなだけど……」

満枝のことだ。どきりと心臓が鳴った。悦子もいる席で、磯田夫妻に伊集院満枝から多額の援助してもらったと喋ったことがあった。悦子はそれを覚えていたのだろう。

悦子は言った。

「伊集院さんって、いいひと？」

小百合は即答できなかった。やや黙した後、ええ、いい人よ、なぜ、そんなことを聞くのと悦子に訊ね返した。

悦子は答えた。

「今日、伊集院さんという女の人が学校に来たの。教室で満州の珍しいお話をしてくれたわ。終わった後、ちょっとおしゃべりしたら、小百合姉ちゃんのこと知っていたから、びっくりしちゃって……。ひよっとして、あの伊集院さんなのかなあって」

悦子の通う高等女学校では、時折、地元の名士や官吏を招いて、生徒向けの講演会を行っていた。満枝が、どういう経緯で講師に選ばれたのかはわからないが、二十歳そこそこで川奈産業の大株主となり、満州で事業に成功した満枝は、女学生にとっての憧れの的だろう。

頭では理解できたが、満枝が悦子と出会ったことに、不安を抑えることができなかった。

「伊集院さんは……」

語尾が震えるのをとめられぬまま、小百合は無理に笑みを作って言った。

「何かおっしゃってた？」

「小百合姉ちゃんは成績優秀なしっかり者だから、いろいろ教わるといいわよって言ってた」

「それだけ？」

「うん」

「そう……」

小百合は口を噤んだ。

北海道日市にいたころの小百合にとって伊集院満枝は、大勢の男性を去勢した殺人者だった。

猪俣佐和子を唆して婚約者だった川奈昭一郎を死に追いやった。昨夜もおそらく、縁もゆかりもない柔道家二人を殺害した。

その満枝は、なぜか昔から小百合に目を掛けていた。支那の革命家が書いた危険文書を読ませたこともあった。夫の増田喬を川奈産業に入社させ、今は孤児院建設を目指す小百合の支援者でもある。なぜ、伊集院満枝が自分の人生に関わろうとしているかは分からぬまま、奇妙な縁が続いているのだ。

「ねえ、小百合姉ちゃん」

「なに？」

「小百合姉ちゃんは、伊集院さんの話になると、口が重くなるんだねえ」

胸を突かれたようだった。しばらく息が止まった。見ると、悦子は心配そうな眼差しを向けていた。

「悦っちゃんはどう思った？」

小百合は訊ねてみた。

「伊集院さんのこと」

「そうだねえ……」

悦子は考えをめぐらしていたが、やがて口を開いた。

「あの人に似てるね」

「あの人って？」

「東京で、あたしを助けてくれた人」

それが、猪俣佐和子のことだと気づくのに、やや時間がかかった。そして佐和子が、悦子の目の前で、不良少年の睾丸を潰したことに。

II

江戸川沿いの堤防は、寒い冬の風にさらされていた。

「風邪ひいちやうよオ」

毛皮のコートの襟をたて、寒そうに肩をすくめながら、貴代美は大股で歩いた。

「中央委員会なんて言うから、旅館でも借り切つてやるのかと思つたら、委員長のおうちに集まつてやるもんなんだねえ」

「仕方ないです」

並んで歩いてきた小柄な男が答えた。三十がらみの鳥打ち帽をかぶつた労働者風の男で、背丈は大柄な貴代美より低い。

「村野さんは具合が悪くて、この季節、外を出歩けませんから」

「ねえ、清水くん」

貴代美が言った。清水と呼ばれた小男は、年下なのにぞんざいな口ぶりの貴代美に、特に気にしたふうもなく、なんです？ と答えた。

「あたいは中央委員会に出るのは初めてだから、最初に知つておきたいんだけどサ」

貴代美は小首を傾げて言った。

「あたいたちの党の目的って、何？」

清水は噴き出し、それから声を低めて、社会主義革命ですよ、と言った。

「そうなのかなア」

貴代美は、顎に指をあて、空を見上げた。

「モスクワから帰つてきてこの方、ずっと裏切り者だのスパイだの尋問ばかりやつてるんだよ。なぜ、金持ちとか政治家とか、悪い奴じゃなくて、同じ党の仲間のきんたまばかり踏みつけてるのかなアって」

きんたまという言葉に肩をすくめながら、清水は説明した。前中央委員である三沢が、実は特高警察が送り込んだスパイだったこと。三沢の扇動により、党は大きな過ち——美人局などの破廉恥な行為で金を稼いだ挙げ句、銀行強盗までやらかしたこと。その後三沢は逐電し、党は当局の大弾圧を受けて壊滅状態になったこと……。

「だから、みんな疑心暗鬼なんです。誰がスパイか分かつたもんじゃない、と」

「それじゃ、あたいだつてスパイと疑われるかもしれないねエ」

清水の足が止まった。そんなばかな……、と呟いたが、面差しが引きつっていた。

かつて、鶴沼の海岸に近い農家の離れに間借りしていた村野栄太郎は、今では党が用意した東京市内の江戸川べりに建つ一軒家に住んでいる。枳殻の生け垣に囲まれた三間ばかりの平屋であつた。

「よく来てくれましたね」

貴代美と清水を玄関まで松葉杖で出迎えたのは、村野栄太郎自身だった。まだ三十代半ばだといふのに皺が深く刻まれ、肌の色が悪く顔の斑点が目立つ。幼時に関節炎を患って左脚がない。ハウスキーパーの女性と、夫婦と称して二人で住んでいるはずだが、なぜ、彼女が出迎えないのだらうかと、清水は訝った。一方の貴代美は、はじめましてと遠慮のない大声で、にっこり笑って頭を下げた。

奥の六畳間に通された。火鉢が置いてあるだけの、殺風景な畳の間に、男が二人、待っていた。岩本と赤間という三十前の青年で、大学で村野の講義を聴講していた事もあるインテリたちだ。ことに岩本は、学生時代に総合雑誌の懸賞論文で第一等を取り、本も何冊か著している。

部屋に入ってきた貴代美と清水が挨拶すると、岩本と赤間は、無言で一瞥したきりだった。

「お行儀悪いんだなア」

コートを畳んで座りながら、貴代美は言った。岩本と赤間が、目を剝いて貴代美を睨んだ。貴代美は平然と続けた。

「親の躰が悪いのかもしれないねエけど、人に挨拶されたら、ちゃんとお返事するもんだぞ」

「村野さん！」

松葉杖を置き、やっと座った村野に、岩本が叫んだ。

「だからぼくは、この人たちを委員にするのは反対だったんです！」

「あれ、あんたさア」

貴代美が、岩本の顔をのぞき込みながら言った。

「どこかで見た顔だと思ったら、小沼さんとこの研究会に来た学生さんじゃないか！」

四年前。貴代美がまだ正式の党员ではなく、女工として働いていた時のことだ。小沼健吾は、労働者や女工をさかんにオルグし、自らの「隠れ家」で社会主義思想を学ばせる勉強会を開いていた。

ある夜、貴代美ら数名の女工を招き、マルクスとエンゲルスの共著「ディールコムニステイションマニフェスト」の研究会が開かれた。貴代美は講義の最中ずっと居眠りし、講師に注意されて目を覚ました彼女は、あたいたち労働者が団結して悪い金持ちのきんたま蹴り潰してやしないと世の中よくならナイってことです！と突拍子もなく叫んだ。女工たちは笑いさざめき、講師は怒って会を途中で打ち切って出て行った。

そのときの講師が、今、中央委員に昇格した岩本だったのだ。

「もちろん、君のことは忘れていない」

岩本は額に青筋をたてて言った。

「女工ふぜいに、あれだけ侮辱されたのは、初めてだ」

「そういや、おさわちゃんに会ったのも、その夜だったんだ」

いきりたつ岩本に構わず、貴代美は懐かしげに天井を見上げた。

「おさわちゃん、元気かなア」

「君、ぼくのことを馬鹿にしているのか？」

「馬鹿にしちやいないけどさア」

貴代美は真顔になり、向き直って岩本を見た。

「さつきから聞いてりや、女工女工って、その貧しい女工を助けて平等な社会を作るのが、あた

いら黨員の仕事じゃないのかよ！」

返す言葉が見つからないまま、怒りに震える岩本を、村野や赤間が必死に宥め、清水は、言い過ぎだよ、とおろおろするばかりだった。そこに、案内も請わず、人が入ってきた。

「遅くなりました」

低く落ち着いた声音に、おお、畑野くんか、と村野が救われたように言った。畑野と呼ばれた男は、頭を丸刈りにして、がっしりした体軀の巨漢だった。入り口に座って丁寧^{ていねい}に頭を下げる。

岩本と赤間は、顔を擧めて口を噤んだ。

昨年から冬にかけ、当局は党の大弾圧を行い、主立った幹部は根こそぎ検挙された。数千人を数えた党は壊滅状態になった。

その党を建て直したのは、三十五歳の畑野達男^{たつお}だった。有能な幹部であったが、学歴がなかったため中央委員にはなれず、それが幸いして警察の捜査網を逃れることができた畑野は、ちりぢりになった黨員の再結集に尽力した。ようやく百人ばかりをかき集めることができ、「党」は「再建」されたものと見なされた。

そういう畑野の動きに反発したのは、岩本や赤間らインテリ黨員たちだった。彼らは恩師である村野栄太郎を押し立てて、学歴エリートを中心とした中央委員の結成を唱えた。苦勞して再建した党組織のてっぺんに、たいした努力もしていない学士様のがっかりというのか。労働者出身の黨員たちは憤激した。結局、村野を委員長に、インテリ組から赤間と岩本の二人、労働者出身グループからは畑野と清水、そしてモスクワ留学から帰国したばかりの貴代美が、委員に選ばれ、久しぶりに中央委員会が開かれることとなったのだ。

「今日の議題は？」

不穏な雰囲気の中、最初に口を開いたのは畑野だった。村野が、とりあえず中央委員の承認を……と言いかけて、岩本が遮った。

「委員が五人、委員長と合わせて六名というのは、おかしいです」

委員の数は、委員長を含めて奇数であるべきだ。多数決をとって、半数に別れた時に、委員長が採決を下す。そのためには、もう一名、委員を選ぶべきだ、と。

「それは、誰かいい候補がいるのですか？」

村野に問われ、岩本が告げた名に、畑野と清水が顔を見合わせた。

「小泉 俊吉くんです」

小泉は、農民出身の黨員だった。木訥で正直そうな風貌と、命ぜられたことはなんの疑問も抱かず実行する従順さに、いつの間にかインテリ黨員の信頼をも得ていた。

「小泉くんか、なるほどね」

村野は頷き、学者や労働者だけでなく、農民出身者も委員に入れることが、より広い黨員の声を反映させるためにも必要かもしれない。どうかね？

委員たちを見回した村野に、最初に「異議はありません」と言ったのは、畑野だった。貴代美は、その人知らないけど畑野さんがいいって言うのならいいんじゃない？ と言い、清水も特に反論しなかった。

「では、小泉君も交えて、後日、正式な委員会を開き、新たな党方針を定めるということで、よろしいですか？」

岩本が言った。清水が反論した。

「それはおかしい」

今日は、正式の中央委員会というから、官憲の目をくぐり抜けてここまで来た。それを、別の中央委員を任命するだけで終わるといふのは、人を馬鹿にした話ではないか。

「もちろん、これで終わるわけじゃない。ぜひ、議論したいことがある」

岩本は腕組みをして言った。

「ぜひ、お聞かせいただきたいのだが、昨年の秋、当局の大弾圧が行われてから、今日まで、黨員の査問が、四件開かれた。そして、四人の黨員が除名になった」

畑野と清水の面差しが変わった。岩本は続けた。

「査問は、中央委員が査問委員長に任命されて、初めて開くことができる」

昨秋、スパイだった三沢を除く中央委員が根こそぎ検挙されて以来、今日まで、正式の中央委員は不在だった。党の活動は、すべて中央委員が定める方針にのっとり、中央委員の指令で行われるべきであった。

だが畑野や清水らが、ちりぢりになった黨員たちをかき集めてわかつたのは、労働者出身黨員たちの、インテリ黨員に対する根強い不信感だった。生活を捨てて党に奉仕してきたのに、運動はかばかしく展開せず、たださえ苦しい生活はますます窮している。世間知らずのインテリ幹部たちが、三沢のようないかわしい男に騙されたせいだ、という不満は、いつしか、インテリ幹部たちのなかに警察の手先となって贅沢三昧している奴がいる、という噂となった。疑いをかけられたインテリ幹部を査問せよという声が高まった。

そこに帰国してきたのが、貴代美だった。モスクワで秘密警察仕込みの拷問術を身につけた貴代美の手にかかると、どんなに頑固な黨員も落ちるしかなかった。拷問術とは、満座の前で鞆丸を踏みつけるといふやり方である。男たちは悶絶し、許しを請い、尋問者の言うがままに「白状」した。労働者出身の黨員たちの間では、インテリ黨員を簡単に屈服させる貴代美の評判はうなぎのぼりだった。彼女が中央委員に任命されたのは、そうした評判を無視できなかつたからだ。そして、岩本らインテリ黨員が、もつとも目の敵にしたのも、貴代美だった。大学出の黨員たちが、女工あがりの若い娘に急所を踏みつけられ、苦痛と侮辱を与えられた挙げ句、スパイの嫌疑を「白状」し、除名処分になったのだ。選ばれた逸材と自負する彼らにとって、あつてはならない事態だった。

「小堀、古川、篠崎、山根」

岩本は、除名処分となった四人の名前を挙げながら、鋭い目つきで委員たちを見回した。

「この四君の処分は、取り消されるべきだ。そして、改めて四君の査問を行い、もし彼らが無実なら党に復帰させ、勝手に査問を行った者の責任を問うべきだ」

「そりゃ、無理じゃないかなア」

貴代美が口を開いた。

「あいつら、戻ってこれないと思うよ」

「なんだと？」

「どういふことだ」

岩本が腰を浮かせ、赤間が声を荒げた。

「あたいが、きんたま踏みつけてやったからサ」

貴代美は笑顔で言った。啞然とする岩本や赤間に、貴代美は続けた。

「女にきんたま蹴られた男は、蹴った女の顔をまともに見られなくなるからね」

実際、貴代美の尋問を受けた男たちのその後は、「まともに顔を見られなくなる」という程度ではすまなかった。彼らは氣力を失い、活動から脱落していった。見る影もなく老け込み、廃人同然になった者もいる。

貴代美はさらに言った。

「女に大事などころを蹴られるって、そうとう堪えるんだって、モスクワで教わったよ」

モスクワという言葉に、委員たちは口を噤むしかなかった。党員たちにとって、モスクワは絶対だった。

「あいつら呼び戻すんだったら、あたいが辞めるしかないと思うなア」

「それは、できません。なぜなら飯島くんは……」

貴代美を本名で指しながら、畑野が言った。

「極東労働者共産大学の教授であり、党政政治局入りも噂されているワルワラー・イワーノヴナ女史から、成績優秀者として推薦状をもらっています」

モスクワの信頼を得て帰国した貴代美を党中央から外すことは、社会主義の祖国ソ連邦を侮辱することになると言いたげだった。

「この件については……」

この間のやりとりの間、心なしか頬を紅潮させて貴代美を見つめていた村野が口を挟んだ。

「小泉くんの意見も聞いた上で、あらためて協議しましょう」

その後、事務的な件について簡単な打ち合わせをして、委員会は散会となった。大勢で家を出れば目立つ。一人ずつ村野の家を出た。最後に残ったのは貴代美だった。

「飯島くん」

そろそろ出ます、と立ち上がった貴代美に、村野が声をかけた。

「君はほんとうに、あんなことを……」

「あんなことって？」

「つまりだ、尋問の際の男性の急所を……」

「ああ、きんたま踏んで脅すってこと。それが、どうかしたんですか？」

村野は頷き、頷いたまま黙りこくった。顔が紅潮している。へんなの。そんな面差しで貴代美は頭を下げ、部屋を出た。生け垣の格子戸を開け、左右に注意を払いながら、通りに出た。通りの角の電信柱の影から、ひよこりと人の頭が飛び出した。

「あ！」

貴代美が小さく叫んだ時、電信柱の影から顔を覗かせた女もまた、眼を見開いた。ひらりと踵を返し、貴代美に背を向けて歩き出した。

「ちよっと！」

貴代美は急いで後を追った。

「おさわちゃん！」

その名を呼ばれ、足を止めた猪俣佐和子は、ゆっくりと貴代美を振り返った。面差しに、緊張と怯えが浮かんでいる。その様子に気づいてか、貴代美は佐和子に駆け寄り、満面の笑顔で、佐和子を抱きしめた。大柄な貴代美に抱きしめられた小柄な佐和子は、身をこわばらせていたままだった。

「おさわちゃん、相変わらずきれいだ」

ひとしきりの抱擁を終え、貴代美は佐和子の両手を握りしめて言った。

「いい家の奥さんみたい」

和服に地味な海老茶色の羽織といういでたちの佐和子は、平均的な家庭の主婦のようだった。

「お久しぶりね」

やっと佐和子は口を開いた。その声に貴代美はますます嬉しげに笑った。

「ねエ、カッフェーでもいかない？ つもる話もあるしサ」

佐和子は、村野の家のほうを見やった。その視線に気づき、貴代美は訊ねた。

「おさわちゃんも、村野さんを訪ねてきたの？」

「いえ、そうじゃなくて……」

佐和子は口ごもった。貴代美はしばし佐和子を見つめていたが、不意に、面差しを弾けさせた。

「ひよっとして、おさわちゃん。村野さんと結婚したの？」

声を低めて問う貴代美に、佐和子は激しく首を振り、顔をそむけて呟いた。違うわ……。

「そっか。ごめんね」

そう言った貴代美の声から力が失せた。佐和子が顔をあげると、貴代美は大柄な体を縮めるよ

うにして、俯いている。どうしたの？ 悄気かえった貴代美の姿に、佐和子は狼狽えた。

だって……。貴代美は子どもが拗ねるような面差しで言った。おさわちゃん、あたいと会っても、あまり嬉しそうじゃないから。

佐和子はしばらく、貴代美を見つめていたが、やがて口を開いた。三十分くらいなら、いいわ。

貴代美は顔をあげ、佐和子の腕にしがみついた。うん、いこ。そう言って貴代美は、佐和子の腕を引っ張り、大股に歩き出した。

昭和五年の、武装蜂起が不発に終わったメーデー以来の再会だった。

あの時……。佐和子は、党の東京支部の幹部であり、武器を手配する立場だった。貴代美は、小沼健吾の求めに応じ、女工仲間を集めて決起場所に来た。だが、佐和子たち幹部の不手際で武器の到着が遅れた。それでも、党中央はスケジュールどおりの決行を命じた。佐和子は、その命令を伝えるに決起場所として用意された京橋のホテルに向かった。党中央を代表してやってきた佐和子に対し、決起を指揮する立場にあった小沼健吾は怒気を含んで反対し、形の上では「党の命令を無視して」決起を中止した。

そのとき貴代美は、佐和子を持ってきた「党」の指令には従わず、小沼の支持に従って集めた女工たちを解散させた。そのとき佐和子が見いだされ、胸の奥に蟠って消えていない。

それから二年。佐和子は中央委員の三沢に見いだされ、戦闘的技術団で大きな功績を挙げた。だが、それは当局のスパイであった三沢の掌の上で躍らされただけだった。銀行襲撃に失敗し、愛する部下だった海老沼千恵子は警官ともみ合った挙げ句に死んだ。それを見ていた佐和子は、

臆病にも現場から逃げ出した。逃げに逃げて、かつて通っていた鶴沼の村野栄太郎の家に転がり込んだ。佐和子を知っている党員の家は、そこしかなかった。

佐和子は、村野のハウスキーパーとなった。あれだけ嫌だった、村野の求めに応じて彼の股間を蹴ったり踏みつける爛れた日々に戻るしかなかったのだ。

その村野が、党の中央委員長に選ばれ、中央委員会が開かれる事になった。中央委員の一人に貴代美が選ばれた事を知った佐和子は、買物があるので、と言って家を出た。二年間のモスクワ留学から帰国し、中央委員に出世した貴代美と再会することは、自分の惨めな境遇を改めて思い知らされるようで、避けたかったのだ。

だが、久しぶりに貴代美に抱擁され、毛皮のコート越しに感じられた、柔らかな彼女の肉体に、懐かしい感覚が呼び覚まされた。

やっぱりわたしは、この女が好き……。

カフェのテーブルに向かい合って座り、佐和子は檸檬入りの紅茶を、貴代美は餡蜜を喫しながら、互いの近況を報告し合った。

「そっか。おさわちゃんも苦労したんだねエ」

周囲の耳を気にして、なるべく固有名詞など具体的な事柄を避けながら説明する佐和子に、貴代美はしみじみと幾度も頷いた。

「あたいなんか、外国で暢気に勉強していたからね。申し訳ないよ」

「そんなことないわ」

佐和子は言った。

「貴代美ちゃんとまた会うことができ、なんだか元気が出てきた。二年前のことも許してもらったし……」

「そんなこと」

貴代美は首を振って言った。

「あの時から、気にしちやいなかったんだ。なんだか、おさわちゃんを裏切ったみたいで、あたいこそ、申し訳なく思ってたんだよ」

佐和子は俯いた。涙が溢れ出て止まらなかった。慌てた貴代美が差し出す手巾で眼尻をぬぐいながら、佐和子は言った。

また、一緒に、やろうね……。

「うん」

貴代美は頷き、佐和子の手を握った。

「また、一緒にね」